

観峰館 令和3年度春季展

本館4階平常展示

すずり

コレクション展 砚Ⅲ

展示案内パンフレット



(右上) 緑紋板硯 (右下) 瓢箪硯 (中央) 吉祥紋円硯  
(左上) 切竹硯 (凌雲銘) (左下) 紅渓石硯

令和3年 4月 10 日(土)～5月 30 日(日)

## ごあいさつ

「文房四宝」の一つである硯は、文人たちにとって 身近な存在であり、実用品であると共に鑑賞用として人びとに愛されました。現在では石硯が広く用いられており、端渓硯や歙州硯、澄泥硯などが良質な硯として高い評価を得ています。

本展は平成30年度に続く第三弾として、当館所蔵のコレクション約1300面の中から厳選した54面を展示し、各硯の形式や特徴、芸術性などをご紹介します。あわせて、和硯(日本の硯)も展示します。すべて初公開の作品です！

「書の文化にふれる博物館」らしい展覧会を通して、観峰コレクションの層の厚さを、とくとご覧あれ！



緑石龍鳳両面硯

## 硯の歴史

現代の硯に近い意味を持つ硯は、中国・漢代の初め頃に生まれたとされます。漢代の硯は、「磨板」と呼ばれる長方形の粘板岩で、球状の墨の塊を、「磨石」を用いて磨り潰していたと考えられます。

唐代に入ると、学問・芸術の急速な発展、書や詩文の文化の繁栄を受けて、筆硯の需要が増加すると、人びとは良い硯を探し求めるようになります。唐代の硯は、まず瓦硯・陶硯が大部分を占め、続いて石硯が広く用いられるようになり、歙州、端渓などの硯材が尊ばれるようになりました。

特に端渓は、明・万暦年間に良い硯材が産出されるようになると、硯そのものの芸術性が認識されるようになり、優美な彫刻が施され、鑑賞の対象として愛玩されるようになりました。

逸品紹介

No.1 樂浪磚硯



せん 磚、すなわち建物に用いられる煉瓦を再  
利用して硯として用いたものである。

箱書に拠ると、この磚は、中国・漢の時代に朝鮮半島に設置された樂浪郡石巖里より出土したものという。表面の網目模様は、型取りの際に用いられた布目の跡である。

端溪硯について

端溪硯は、中国・廣東省肇慶市高要区に流れる西江の支流に臨む、斧柯山を中心とする辺り一帯より産出する硯石をさします。硯と言えば端溪、という程、端溪の名前は良硯の代名詞として使われます。

その石質は、鋒鉈(硯の表面にある墨を磨るための粒子のこと)が強く長持ちし、硬度が適当で磨墨の状態が良く、その石色は、紫色を基調とし、水に濡らした時には色彩が著しく変化します。端溪硯の中でも、「魚脳凍」、「氷裂紋」、「火捺」など、端溪特有の斑紋(表面に見える文様のこと)があるものや、黄、碧、緑色の層を成す眼があるものが、良質の硯として高く評価されています。

逸品紹介

No.17 宝珠九龍硯

円形の墨池を中心に、宝珠を手にした九頭の龍が大胆に彫刻された雄大な硯である。墨池には蓋があり、蓋部分にも同様に龍が彫刻されており、中央の龍は宝珠を口から吐き出そうとしている。

石質は石炭石であり、石炭石の柔らかい性質と、重厚な黒色が魅力となって、こ



の作品のようなきめ細やかな彫刻が施された硯が作られた。しかしながら、石材の脆さにより、取り扱いには十分な注意を要する。従って、実用的というよりは、美術鑑賞用の硯ととらえるべきであろう。

その装飾性において、今回の展示の目玉となる作品である。

## 銘文について

展示の硯の中に、銘文が彫られているものがあります。銘文の作者は、硯の所有者、硯の鑑識を行った人物などですが、中には、著名な書画家の漢詩なども彫られています。従って、銘の有無によって、硯の価値も大きく変わっていきます。硯だけでなく、硯の箱にも銘文が彫られていることがあります。それらは、硯の伝来を調べる際に、貴重な情報となります。

多くの硯が黒紫色であり、また経年による摩滅のため、見た目では銘文がはっきりと読めないものは、拓本を探ることをおススメします。拓本は、写真では分からない硯の魅力を伝えてくれます。



方硯（古鏞州製銘）裏面 拓本

## 図様～さまざまなモチーフ～

硯の図様は、蘭亭序などの故事をはじめ、松竹梅、龍、蝙蝠などの吉祥を表すモチーフなどに分類されます。またそれぞれの図様は、硯石の特徴、石色、斑紋などをを利用して刻されています。例えば、石眼が宝玉や月に、石紋が雲に、金線が雷に…など、作硯者の創意工夫が発揮されています。



八稜岩窟蟹硯

作硯の工夫は、墨池の形にも表れます。蘭亭硯では、鸞  
鳥が浮かぶ水辺を表現し、龍を彫刻した硯では、龍の  
飛ぶ姿から墨池を雲の形に彫っています。井田硯の  
ように、墨池の形から硯の種別ができる硯もあります。  
硯それぞれが持つ芸術性にも注目してみてください。



岩王寺石の名前は、岩王寺という寺院の奥から 産出した  
石で作った硯を、能書として著名な嵯峨天皇が愛用したこと  
に由来する。現在は、ほとんど産出されないと いう。

嵯峨天皇が絶賛し、和硯の中で並ぶものがないと まで称し  
た逸品である。

また、清滝石は、京都市右京区愛宕山で産  
出される硯石である。その歴史は平安時代にさかのぼり、硯や砥  
石として利用された。砥石や人形の形をした硯は、清滝地方の土  
産物としても愛用されたといふ。

現在は、職人がおらず、その硯はとても希少なものである。



### ☆次回展予告☆

本館4階 夏季平常展示

「寺子屋で学ぼう！」

令和3年6月19日(土)～8月29日(日)

令和3年4月11日印刷・発行

編集 公益財団法人 日本習字教育財団 観峰館

所在地 〒529-1421滋賀県東近江市五個荘竜田町136

TEL 0748-48-4141 FAX 0748-48-5475

<http://www.kampokan.com>